現代における伝道の問題

——私との対話——

長谷川正徳

現在は宗教にとって、まことに厄介千万な時代だといわねばならぬ。宗教に対して、素直にこれを肯定しない思潮が盛んになっている。すなわち宗教を形而上学や道徳に還元してしまうという思潮があるかとおもえば、また他方には、科学的立場からの実証主義的な宗教批判によって、宗教そのものの根基を奪おうとする思潮もある。したがって現代の宗教は、それら諸々の思潮に対して、それらと同じ地盤に立って、それらを批判しつつ、自らの本質を解明しなければならない。

ひろく云って、現代という時代は、宗教と科学、宗教と哲学、宗教と倫理、宗教と政治、等々、つまり、宗教と文化一般との関係が宗教自身にとって、根本的な問題となっている。それは、まづ一つの信仰が固められた上で、考えられてよいというような、信仰にとって周辺的な問題であるのではなく、その信仰が成り立ち得るかどうかに関わる第一義的な問題なのである。

現代の布教、教化ということを考えるに当っては、まづこのことが充分に理解され、認識されねばならない。そしてこの問題から生ずる課題を果しつつ、その上で説かれる教説において、始めて現代人を納得させ、入信せしめるものとなるのである。

ところが、実際は、このような問題が、充分問題として醞醸されているかどうか、甚だ疑わざるを得ないというのが現況である。だからこそ、教化を要さないインスタントな御利益主義のみが流行して、真に自己内面の深い霊性的自覚と、結びついた宗教が沈滞してしまっているのであろ

う。つまり右に述べたような信仰にとっての第一義的な問題が解かれない限り、布教、教化は本当の実効を挙げ得ないということである。

しかし、このことを考える場合、直接の伝道の場に、問題解明の責を負わせてしまうことはもとより不当である。宗教と文化一般との対決、その信仰がいかにして可能であるかという、宗教や信仰にとっての第一義の問題の解明は実は教化、伝道のよってもって立つ教学の負うべき使命であった筈である。

これまでの多くの仏教とその教団が、一般人の宗教的要求に耳を傾け、それに応ずるという、そういう努力をどれだけしてきたであろうか。そういうことよりも、自宗の学を自宗の内部で、より精密にしてゆこうという、そういう傾向のみが強かったのではないか。現代における信仰の実際ということよりも、自宗の伝承された宗学や、教学の研究のみが主であり、したがって一般の宗教的要求というものは殆ど無視されてしまった。

かくして、訓詁宗学や伝統教学は、いよいよ自らの立場を純化し、深めることは出来たけれども、反面その立場を封鎖的にし、その教学にみちびかれる教団をも封鎖的、保守的な性格のものにしてしまったのである。教学のみが純粋になり、深化され、論理的精緻さや整合が、いよいよ加わったところで、教団が現実から遊離し、沈滞してしまったのでは、何とも悲劇ではないか。

われわれの布教、教化や、それの包括主体である教団の現実への作用力の欠如は、また困ったことに、常に現実への無批判的追随という現象をもたらすのである。

かって、皇国無謬思想がさかんであったとき、教団の姿勢はどんなものであったか。教団によって指示された教化の内容は、多く戦争肯定論であり、皇国絶対主義の謳歌ではなかったか。戦争に際しては、戦争肯定であり、いま、民主主義の時世になれば、仏教民主主義を何の苦もなく主張する。一体、教団のどこに、自己の根本的立場からの歴史との対決、時代を作る主体というものがあるのか。そういう教団の無批判的追随や単なる適応は、教団にとっての核心たるべき教学の負う一つの責ではなかろうか。伝統の線に沿う方向にのみ、自己を純化し、現実への方向を排除してきた教学が、教団の現実追随や現実妥協の因をなしていることはいかにもあきらかであろう。

この場合、教学は、教団に対し、そんな無批判な現実追随を許してもいないし、認めてもいないと云うかもしれない。しかし、教学はあくまで教団の精神ともいうべきもの

であって、教学の純化は、そのまま教団の精神的純化であり、その現実遊離は、そのまま教団の現実遊離につながる。ところが教団というものは、他方において、いわば身体的に現実の世界に組みこまれているのである。その限り、右に述べたように、教団は精神的に現実から遊離していればいるほど、実際的には、それだけ容易に、現実への無批判的追随に陥ち易くなるのである。だから、それ自身、現実との接触を離れた教学は、教団の現実遊離の傾向を否認することはできても、教団と現実との接触面において、教団の動きを積極的に方向づけるということはなし得ず、したがって教団を現実への単なる追随者たらしめてしまうということになるのである。

ここにおいて、教団の核心であり、現代の布教、教化を真にみちびき出す現代教学はどうあるべきかの教学への要請がはっきりしてくる。

まづ第一に、教学は現実に根ざした宗教的要求の自由の根源から、自らの信仰教義を再把握するという方向に構築さるべきであろう。通常には、教学が信仰を規定するという方向がとられるが、今日においては、信仰が教学を形成してゆくという転換がなさるべきである。教学が信仰を規定するということは、安定期の軌道である。現代のごとき一種の基礎的危機ともいうべき時期にあっては、信仰の新しい可能性が、新しい教学を形成してゆかねばならない。もともと、教学から信仰が出たのではなく、信仰から教学が生れ、整合されたというのが本来である。その本来に、今日は還帰せねばならぬというのである。

次に、新しい教学は、ことに明治以後、さかんになった仏教や仏教史の実証的研究の成果というものを、じゆうぶん取り入れなければならない。新しい研究は、必ずしも教学的、或は護教的ではない。それは信条の拘束を脱した自由な研究の立場で、学術的になされている。そういう方法や立場でなされた印度哲学や仏教の歴史に関する優れた成果は、もはや無視したり、排除することはできない。教学に課されたこの作業は、まことに重要かつ困難をきわめたものであろう。しかし、ことは緊急を要するのである。

かくして、更新され、再把捉された新教学は、現実に根ざした宗教的要求に応えたものとして、現実の内面に深く喰いこみ、真によく現実を動かすエネルギーを持つ。その教学から発動する布教、伝道は、悪魔の支配にまかされ、迷信に災いされた現実を、よく救い得るものとなる。そのとき、その教団は、真に生きた伝道護法教団として、自らの新生を遂げるものとなるであろう。（一九六八・二・一七）